

左館 秀之助（さだて・ひでのすけ）

1、プロフィール

小説家。昭和 25 年同人誌「北方人間」創刊。作品を発表。昭和 32 年「たづな抄」で第 1 回東奥小説賞。33 年「鳥ぐるい」で講談倶楽部賞。37 年「木石抄」で直木賞候補。

<生没>

1924(大正 13)年 10 月 8 日～ 2017(平成 29)年 2 月 20 日

<代表作>

短編小説「鳥ぐるい」「木石抄」

長編小説「山麓記」「童子ごよみ」

短編集「修羅」

短編連作「にいだ川」

<青森との関わり>

八戸市生まれ。旧制県立八戸中学・青森師範学校卒業。八戸市在住、市内小学校長を歴任。

2、作家解説

小説家。大正 13(1924)年八戸市生まれ。県立八戸中学から満州国新京工業大学へ進むが病気のため帰郷。代用教員を勤めるが改めて青森師範学校入学。昭和 22 年卒業。読書の本格的な出発は師範学校時代である。出隆「哲学以前」西田幾多郎「善の研究」倉田百三「愛と認識との出発」等哲学書や歴史書であり、多くの文学書に親しむ。八戸市大館中学校が教員生活の振り出しである。

25 年、中寒二、北彰介の 3 人で同人誌「北方人間」を創刊。「魔性」「不毛の時間」等の長編小説を精力的に発表する。31 年、東奥日報社創設の第 1 回「東奥小説賞」に「たづな抄」が当選。最終選者が石坂洋次郎である。33 年「鳥ぐるい」が第 11 回講談倶楽部賞を受賞。(選考委員は新田次郎他 4 氏)「木石抄」はオ一

ル読物新人賞の候補になったが入選に至らず、編集者が伊藤桂一、早乙女貢、童門冬二、尾崎秀樹らの同人誌「小説会議」に推薦し掲載され、第43回(昭35上半期)直木賞の候補作となる。「次作にこれ位のものを書けたら賞をやりたい」とは木々高太郎の選評である。ちなみに受賞作は池波正太郎の「錯乱」であり、最終候補者に水上勉、佐野洋、黒岩重吾の名がみえる。この年、胸を病み長野・小諸で療養生活を送ることになる。「小説会議」の同人に励まされながらも創作への気分がもどかしいほど昂揚しないのに悩む。学校へ復職する頃からまた書きはじめる。「山麓記」(昭和53年)はこの療養生活をまとめた長編小説である。

49年、これまでの作品を集めた短編集『修羅』を上梓。「たづな抄」も「鳥ぐるい」も、地方色の濃い題材だが、『にいだ川』(昭和50・7～51・6「きたおうう」連載 昭和57年刊)も郷土に材をえた作品である。この頃から作者は「自分の文体が自分の呼吸に合いはじめた」ことを知るようになり、その自然体で書いたのが「童子ごよみ」(昭和51年「デーリー東北」連載)である。この作品で、第5回青森県芸術文化褒賞及び第9回デーリー東北賞を受賞している。他に八中時代が題材の青春群像を描く「少年挽歌」がある。また、歌誌「国原」「まひる野」会員であり、歌集に『山河』がある。

3、資料紹介

○『にいだ川』

図書

1982(昭和57)年2月28日

130mm×182mm

月刊「きたおうう」に、昭和50年7月号から昭和51年6月号まで連載された11編から成る短編連作。「鱈つけサブ」を巻頭に「河口」「甘茶の杓」「落ち鮎」「鮭」「弥三郎節もどき」「草ぶね」「なにやどやれ」「しがらみ抄」「笛」「雑魚たち」で構成される。